

「暗闇に差し込んだ光」  
マタイによる福音書 4：12-17

イエスさまは、ガリラヤから宣教を開始されました。では、ガリラヤの地とはどのようなところだったのでしょうか。また、なぜガリラヤだったのでしょうか。

ガリラヤは、北の境に位置するため繰り返し北からの侵略にさらされた地域でした。そして紀元前8世紀、アッシリアの占領下に置かれました。その後も、次々に諸外国の支配下に置かれることとなりました。その間に入植者との混血も進み、その結果、ガリラヤは宗教的にも文化的にも純粋性が失われ、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれるようになりました。それは軽蔑を込めた呼び方でした。ユダヤ人にとってガリラヤは、ただ都から遠い北の果てにある地域というだけでなく、「救いからも」遠いという意味が込められているのです。しかし、イエスさまは、そこからメシアとしての活動を開始されたのです。

それは実に象徴的なスタートでした。なぜなら、イエスさまは実際に、救いから最も遠いと見なされていた人々に福音を告げ知らせることになるからです。イエスさまが行かれるところ、そこには徴税人がいました。罪人と呼ばれる人たちがいました。病のゆえに「汚れた者」と見なされていた人たちがいました。「罪の女」と呼ばれるような人たちがいました。そのような人々が、イエス・キリストと出会って福音を聞くことになるのです。

「異邦人のガリラヤ」へとイエスさまは向かわれました。それは預言者イザヤの預言の成就だ、と聖書は語ります。「暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が差し込んだ。」(16節) このことが実現したのだと。

ところで、「暗闇に住む民」とはどういうことでしょうか。ガリラヤは侵略を受けたから暗闇にいるのでしょうか。アッシリアに占領され、異民族に支配されているから暗闇にいるのでしょうか。そうではありません。聖書は、イスラエルが滅んだことをただ不幸な出来事として記しているわけではありません。それは神に背き続けてきたイスラエルの歴史に起こった出来事として記されているのです。そこに示されているのは神の民の不信仰の歴史なのです。

確かに国を失ったことは不幸です。災いです。暗闇の中に置かれることでもあると言えます。しかし、本当の暗闇は、不信仰の暗闇なのです。神さまに信頼を寄せることができなくなって、神の言葉に聞き従うよりも、神ではない者の声に聞き従って生きようになってしまった。そのために、その生き方が神を失って「暗闇」に生きる者となってしまっているのです。

さらに言うならば、それは神の愛に背を向けている暗闇とも言えるでしょう。神さまがどんなに愛してくださっていても、神さまがどんなに呼びかけてくださっていても、神さまがどんなに手を伸ばし続けてくださっていても、それに気づかない。そうやって神さまが、私たちが愛してくださっていることを見失ってしまう。

実際、イエスさまが出会った人たちは皆そうだったのです。徴税人たちは自分が神に愛されているなんて思ったこともなかったでしょう。罪人たちは、自分たちはどうの昔に神から見捨てられていると思っていたことでしょう。イエスさまが出会われた病気の人たち、彼らは、自分は神から呪われているからこんな病気になったのだと思っていたに違いありません。神の愛とは無関係に生きている、神の愛を信じることなく生きている、そんな暗闇が自分の場所だと思って、もう何年も何年も生きてきたのです。

では、私たちはどうでしょうか。私たちも同じではないでしょうか。「神さまがこの私を愛して、救い主を送ってくださいている」、それが真実なことであるのに、その神さまの救いの御手

が、現実に関自分の上に働いていることに気づかなくなってしまう。神さまがどんなに私たちを愛して呼びかけてくださっている、心が頑なになって、神の愛を信じようとはしなくなってしまう。そういう時、まさに私たちも暗闇に住む民となってしまうのです。

しかし、聖書は「暗闇に住む民は大きな光を見た」と宣言するのです。イエス・キリストが光として来てくださった。主イエスのあの十字架の贖いの死と復活の出来事に目を上げるならば、そこに神さまの愛が見える。神の完全な愛の現れとして、イエス・キリストは来てくださったのです。キリストが完全な罪の赦しと共に、完全な神の愛を携えて来てくださった。だから、もう私たちは暗闇の中に住まう必要はないのです。

それゆえに、イエスさまはこう言われたのです。「悔い改めよ。天の国は近づいた」(17節)と。これは直訳すると「悔い改めよ。天の国は近づいたから」となります。ですから、これは私たちが悔い改めれば、天の国に近づくといいものではありません。天の国は近づいたのです。だから悔い改めよ、とイエスさまは言われるのです。

この「天の国」は、死んでから後に行くところではありません。「天の国」は「神の支配」と言い換えることもできます。神さまの支配なされる世界が、もうすぐそこまで来ている。いや既にイエスさまが来たことによって始まっている。イエスさまがおられる所、イエスさまと共に歩むところ。そこに天の国、神の国は来ているのです。

この天の国への招きに応えていくために私たちに求められていること、それが「悔い改め」です。悔い改めというのは、反省することではありません。神さまのもとに立ち帰ることです。「あなたがたの心は神の愛から離れて闇に向いていた。闇にうずくまるような思いだった。しかし今こそ光に向きなさい」、そうイエスさまは招いてくださっているのです。

ある牧師は、このことを「聞く者にとって決断のときが迫っている事柄」として、とても面白い例えを用いて説明しています。

「込み合った空港ターミナルの中には何千人もの人々が動きまわっている。絶えることのない、がやがやとした騒音を越えて、一つの声がスピーカーを通して鳴り響く。『362 便がただいま 23 番ゲートに到着いたします。ニューヨーク行きのチケットをお持ちの方は 23 番ゲートで搭乗手続きが出来ます。』

何人かの人、そのアナウンスが聞こえず、それまで通りにしている。他の人たちはそれを聞くが、別の便を予約しているので注意を払わない。しかし一刻も早くニューヨークに行きたいと思っている人は、荷物をまとめて、23 番ゲートに向かって歩み始めるのである。」

ここに天の国の宣言を聞く人々の姿を見ることが出来ます。アナウンスは全ての人に聞こえるように鳴り響いています。しかし、聞く人と聞かない人がいる。聞いても無関心な人もいる。その中で、聞いて決断する人は、神の国の門をくぐる事が出来るのです。

プレゼントを差し出されても、自分で受け取らなければ自分のものにはなりません。太陽が昇っても、自分でカーテンを開けなければ部屋は明るくなりません。どんなに光が照らされても、背を向けたままならば、見るのは自分の暗い影だけです。暗闇に住む民が大きな光を見るためには、その光の方に向き直らなくてはなりません。だからこそ、イエスさまは言われるのです。悔い改めなさい。方向転換しなさい。救いは近づいた。そこにまことに光があるからと。

「暗闇に住む人々は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ」。この光に向かって私たちも共に歩む者でありたいと願います。